

# 新技術の活用普及とコンサルタントの使命

木 寺 佐和記

新技術の活用普及に対する建設コンサルタントの使命は、極めて大きい。しかしながら、現状を振返った時、我々の貢献は十分ではない。原点に戻り、優れた技術、新技術の提案に、厳しい時代であるからこそ傾注、努力すべきである。その有力な方法がNETISの有効活用であるが、コンサルタントへは、NETIS活用に関するインセンティブが十分浸透していない。プロポーザルの採点基準とする、成績評定、個人評価に取入れる等が考えられる。また、登録技術の信頼性向上が必要である。

キーワード：新技術活用、建設コンサルタントの使命、NETIS、インセンティブ策、閉塞感打破

## 1. はじめに

「九州建設技術フォーラム 2005 in 福岡」<sup>1)</sup>が産官学連携によるさらなる情報交換を目指して、2005年の10月、福岡市で開かれた。建設コンサルタント業界に身を置くものとして、昨今の閉塞感を打破する方向性やヒント得ることを期待して、パネルディスカッションを聴講していた。その時、「学」のパネリストから「新技術の活用方策において建設コンサルタントの果たすべき役割は極めて大きい」と指摘された。当然のことを指摘された訳であるが、残念ながら私を含めて会場から建設コンサルタントの立場で、状況説明なり、課題なりの発言を行う方がいなかった。最後に、会場を交えて討論会の時間が用意されていたが、あいにく、建設コンサルタントの有識者が見当たらず、私が言い訳めいた発言を自分でするしかなかった。前置きが長くなったが、言い訳めいた発言の少しだけでも名誉挽回ができればと思ひ、この報文をお引受けした。

## 2. コンサルタントの使命

新技術の活用は前々から建設コンサルタントの大きな使命の一つである。1989年策定の「ATI構想」や2003年の「建設コンサルタント21世紀ビジョン」<sup>2)</sup>においても、「技術を競う」「技術競争市場の形成と技術開発」等のキーワードでその重要性を謳っている。上記両ビジョンの詳細に触れる余裕はないが、いずれにしても建設コンサルタントの存在意義は、「いかに優れた技術を、限られた時間と費用の中で、顧客・社会に提供できるか」ということに尽きると言え、この意義は昔も今も変わらない。優れた技術とは新技術に限っ

たものではないことは確かであるが、社会、経済、自然環境、グローバル化がこのようなスピードで進んでいることを考えれば、新技術の導入、提案は、少し大げさな意見かもしれないが、我々、建設コンサルタントの存在意義と直結する程の重要な問題と考える。

このように、筆者が新技術活用の重要性を強調する理由は、まとめれば以下の3点である。第一は、既に述べたように、建設コンサルタントの本来の使命・あるべき姿からくるものである。第二は、新技術を積極的に推進していくことは、我々の閉塞感打破の方策の一つとして十分使えると考えるからである。新技術には若い技術者を惹きつける力もある。最後の理由は、アジア諸国との関係に関して感じることもあるからである。日本の友人の一人が韓国で技術顧問として活躍中であるが、外から日本を見て、技術全般はもちろん、細部までこだわる美意識、環境への配慮、チームワークの重視等、日本の技術と技術者のレベルの高さを再認識しているという話を何度も聞いているからである。国際競争力の観点からも、我々は自信を持って、新技術の活用を推進していくべきと考える。

また、2005年から「公共工事の品質確保の促進に関する法律」が施行され、建設コンサルタントとしては、外部環境からもこの命題に正面から取り組む環境が整備されたことは特筆される。

## 3. 新技術の提案は十分か

それでは、建設コンサルタント技術者は、これまで、存在意義と直結するようなこのテーマについて、十分な使命を果たしてきたであろうか。新技術情報提供システム（NETIS）の積極活用を含めて十分ではない

というのが現状ではないだろうか。同輩の意見もお伺いしたい。

独自また共同開発した技術を提案することが理想ではあるが、建設コンサルタント業界の規模等を考慮すれば、他者が開発した技術を参照、提案する機会が圧倒的に多いと思われる。国土交通省直轄工事に関する設計では、特記仕様書に NETIS の活用が謳われているため、NETIS 内を検索し、その内容と従来技術の比較を行う。しかし、地方公共団体からの発注工事となると、積極的に NETIS を参照しているかというところ必ずしもそうではない。結局、受身的な立場でしか行動できていないということが現状ではないだろうか。

さて、現在、NETIS は新制度へ移行中であり、2005 年 4 月からは試行運用が開始されているが、何人かの技術者に NETIS の印象を聞いてみた。従来システム時点の意見が大半であるが、実際に活用した側の意見として参考までに述べると以下のとおりである。

- ①実績が少ない技術が多い。
- ②歩掛り等の積算基準が示されていないものがある。
- ③歩掛りが明示されていたとしても、開発者の立場での数字であるため、そのまま信頼できるか不安である。
- ④留意事項は記載されてはいるが十分ではなく、良い点ばかりが強調されているものがある。
- ⑤①～④を含め、記入されている情報では足りないので、結局は、開発者への問い合わせ等が避けられず時間を要する。
- ⑥調査を行い使えたと提案しても、実績が少ないと発注者が不安を持ち採用までには至らない。
- ⑦日常業務では、あまり NETIS を意識していない。
- ⑧技術的保証が十分では無いものも登録されているという印象を持っている。

このような意見の中で、筆者が特に気になった意見が、「日常業務において NETIS をあまり意識していない」と「技術的保証が十分では無いものも登録されているという印象を持っている」という意見である。発注者側と建設コンサルタント側に大きな認識の違いがあるのではないかと懸念する。

#### 4. 解決の方向性と方策

第一に、建設コンサルタント自身が、自分たちの閉塞感打破の方策の一つとして、原点に戻り、自発的に新技術の活用促進に向けて業界を上げて取組むことである。自動車業界等、世界をリードする日本人技術者である。そこでのキーポイントの一つとなったと聞く

「日本流のナレッジマネジメント」<sup>3)</sup>に具体的に見習う点も多いし、その素養は我々にも十分備わっているはずである。

しかし、理想論でこの問題が解決するとは思っていない。先にも述べたようなインセンティブを一層感じさせるような施策が必要である。また、現在実施中の登録技術の信頼性確保の施策も必須である。具体的な施策としては、以下のようなことが考えられる。

- ①プロポーザルの採点基準に新技術活用の有無を入れる。
- ②業務の成績評価の中に新技術の提案の有無、その内容の妥当性を入れこむ。
- ③技術者の個人評価に同様に新技術の提案の有無を考慮する。
- ④計画系、上流系の業務であっても、実施設計等の次の工程に対して、新技術の活用提案があった場合は、成績評価で考慮する。
- ⑤計画系、上流系の技術の登録も促進させる。
- ⑥登録技術の信頼性向上の改善施策を継続実施する。
- ⑦発注者内、コンサルタントへの教育と広報をさらに徹底する。

#### 5. おわりに

重複するが、我々の自発的な行動、インセンティブに関する施策、及び信頼性向上に関する施策等が上手く噛みあっていけば、NETIS に代表される日本の新技術に関するデータベースに国内のみばかりか、アジア諸国からのアクセスが急増することも夢ではない。そんな日が近い将来に来るように、夫々が、夫々の立場で切磋琢磨することを祈念して、おわりとしたい。

J C M A

#### 《参考文献》

- 1) 九州地方整備局ホームページ, [http://www.qsr.mlit.go.jp/s\\_top/i-forum.html](http://www.qsr.mlit.go.jp/s_top/i-forum.html) (※2004 年度からは従来のフェア形式から産学官連携をテーマとしたフォーラム形式に変えて開催している)
- 2) (社)建設コンサルタンツ協会新ビジョン特別委員会: 建設コンサルタント 21 世紀ビジョン改革宣言, 平成 15 年 5 月
- 3) 野中郁次郎, 竹内弘高: 知識創造企業, 東洋経済新報社, 1996 年

#### 【筆者紹介】

木寺 佐和記 (きでら さわき)  
西日本技術開発株式会社  
環境整備部長

